95　誌上発表　『困学穴法』について

山﨑　陽子
日本鍼灸研究会

『困学穴法』は江戸後期の天保6年（1835）に刊行された，漢文体で書かれた横本の経穴書である．序1葉，困学穴法凡例2葉，困学穴法目次5葉，周身骨部名目摘解・穴歌・部位図など12葉，困学穴法28葉，困学奇兪目次1葉，困学奇兪22葉，都合71葉からなる．なお，本書には，末尾の困学奇兪のあと，更に『神応経』から採録した「漢用和法八穴」と題する2葉が附加された版本も見られる．

著者である石塚汶上について，『国書人名辞典』では名を尹，号を不玉斎，通称を汶上とするが，小川春興の『本朝鍼灸医人伝』（1933）に東京都港区笄町の長谷寺の境内にある碑文から採録したとされるものが載せられている．それによると，汶上の名は正尹，字は喜州，天保14年（1843）4月18日に72歳で没し，台東区東上野の真宗大谷派法恩寺に属する専念寺に葬られたとされる．『困学穴法』以外の現存する著作は，刊本に『護痘錦嚢』正続各二巻（1823～1824），『掌中麻疹方』（1824），『護痘錦嚢須知・種痘管窺』合二巻（1834），『困学医言』（1840），写本に『傷寒論私衡』（東北大学狩野文庫，自筆，10冊）がある．これ以外にも『護痘錦嚢』続篇の奥付に『傷寒弁證』『傷寒弁方』『痘矩』『疹規』『経穴便書』を載せ，『近代著述目録後編』巻一に『護疹錦嚢』『下谷名医彙論』を録するが，現存を確認できない．

本書に序文を寄せている小川汶庵（1782～1847）は，名は忠実，号は竹塢，江戸幕府医官で，天保9年（1838）に法印に叙せられている．序文では汶上のことを「吾友」と称し，また汶庵は汶上の『護痘錦嚢』にも序文を寄せていることから，その親交が感じられる．ちなみに前記の長谷寺は，伊沢家の蘭軒・柏軒父子の墓所として名が知られているが，小川汶庵の墓も同所にある．

凡例によれば，本書は「挨穴の捷径を考核して，これを抄録し，以て急索に備う」ために編まれたもので，書題は『論語』季氏篇の「困しみてこれを学ぶ」に由来する．

困学穴法部分は，十四経所属の経穴について，頭部，面部，頭頂部，肩膊部，側腋部，側脇部，胸部，腹部，背部，手部，足部の11部に354穴を配当し，さらに補遺として中枢・急脈の二穴を『類経図翼』から補い，別名として絶骨・丹田・泥丸宮・三陽五会・肉郄・跗陽の六名を録している．これは『甲乙経』巻之三に類似する構成である．ただし，目次では穴名を五十音順に配列して検索の便をはかっている．また各部の最初には，『霊枢』骨度篇と『類経図翼』に基づき，「折法」と称する，縦横2つの骨度法を附し，かつ本文中の穴の下にも「折法」の第号を附加している．こうした取穴法は，堀元昌（1725～1762）の有名な挨穴寸尺法に類似し，かつ凡例の「挨穴の捷径」という言葉は，挨穴寸尺法の最初の影響の現れである杉原敦の『挨穴捷徑』（1761）を想起させる．

困学奇兪部分について，凡例では「本邦経験の諸兪穴，名づけて困学奇兪と曰い，巻端に附載す」と述べるにとどまるが，実際には灸穴を点ずる際の姿勢に始まり，同身寸，四花患門，脚気八処穴，脊背五穴，一本堂灸点図説，あるいは十四経に属する経穴の簡便取穴と本朝灸法が，多数の図を交えて説明されている．江戸後期の灸法書においては，こうした取穴や施灸の絵図が挿入されることは珍しくないが，本書のような多数の絵図は他に例を見ない．

本書は一見，初学者のための経穴書に見えるが，実際には江戸前期から中期の経穴書の主流を形成した『十四経発揮』と『類経図翼』に依拠しつつ，堀流経穴学の成果を踏まえ，しかも江戸中期から後期に流行した香川流灸法や奇穴，本朝灸法まで網羅した総合的な経穴書となっている．